

中上級学習者を対象とした聴解授業

—「聴解演習D」授業報告—

廣瀬裕子

A Class Report of “Listening Comprehension D”
for Upper-Intermediate-Level Japanese Learners

HIROSE Yuko

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター

2024

中上級学習者を対象とした聴解授業

—「聴解演習D」授業報告—

A Class Report of “Listening Comprehension D”
for Upper-Intermediate-Level Japanese Learners

廣瀬裕子

要旨：

本稿は、岐阜大学日本語・日本文化教育センターの日本語研修コースにおける中上級学習者を対象とした聴解授業「聴解演習D」の授業報告である。筆者が担当した「聴解演習D」では、「日本語で授業を受けたり研究活動をしたりするために必要な聴解能力を高めること」を目標にするとともに、JLPT N1レベルの聴解力をつけることも目指した授業を計画・実施してきた。本稿では、コロナ禍の影響を受けなくなった2023年度前期から2024年度後期までの計4学期に実施した授業について取り上げ、その内容を報告するとともに、今後に向けての課題を述べる。

1. はじめに

岐阜大学日本語・日本文化教育センターの日本語研修コースには「集中コース」と「一般コース」の2つのコースがあり、各コースでレベル別の授業が提供されている¹。本稿は、そのうちの「一般コース」の中上級レベル（Dクラス）の授業科目の1つである「聴解演習D」で実施した授業についての報告である。筆者が「聴解演習D」を初めて担当することになったのは2020年度前期の授業であったが、その学期の開始直前にコロナウイルスの感染拡大によって全授業が中止となり、その1か月後ようやくオンラインで授業が行われることになった。そして、その2週間後には対面授業となったものの、状況次第でまたオンライン授業になるという特殊な状況下で授業を行ってきた。そのため、最初の学期では当初予定していた授業内容の変更を余儀なくされた。また、2020年度後期から2022年度後期にかけても、学期の途中でオンライン授業になるケースや、学期を通して、あるいは学期の途中から一部の学生がオンラインで受講する、いわゆるハイブリッド授業になるケースがあったため、予定通りに進められないこともしばしばであった。このような事情から、本稿では、学期を通してすべての学生が対面授業を受けられるようになった2023年度前期から2024年度後期までの計4学期に実施した「聴解演習D」の授業について、その内容を報告し、中上級レベルの学習者に対する聴解授業について考えるきっかけとしたい。

2. 授業計画

2.1 受講者の特徴

「聴解演習D」は、本学の大学院生、研究生、交換留学生の他、日本語・日本文化研修コースの学生（以下、「日研生」）も受講しており、各々の日本語学習歴や日本での滞在年数などの違いから、受講者の聴解能力には毎学期大きな差が見られる。

2020年度前期から2024年度後期までに受講した学生の出身国（地域）は中国が多く、毎学期漢字圏出身の留学生が大半を占めていた。しかしその一方で、2021年度前期以外は、どの学期も非漢字圏出身の学生が数名ずつ受講しており、学期によって受講者の出身国（地域）は様々であった。非漢字圏としては、これまでに、アメリカ、韓国、コートジボワール、スペイン、タイ、フランス、ベトナム、ポーランドからの留学生が受講していた。

受講者の数も学期によって異なっており、おおよそ前期が5名前後、後期が10名前後と、後期に受講者が多くなる傾向にあった。これは日研生のコースが毎年10月にスタートし、「聴解演習D」の授業はコース前半(年度の後期)に受講することになっているという事情によるものである。「一般コース」の受講者は大学院生や研究生が多いため、学期の後半から（クォーター制の）専門科目の授業時間と重なってしまったり、専門の研究が忙しくなってしまったりして欠席が続き、ついには受講を断念してしまうといったケースもあり、学期の途中で人数の変動が見られることもある。

受講者の日本語レベルについては、各学期の初回にJLPT N1レベルの模擬試験を聴解問題のみ実施するとともに、アンケートで日本語学習歴やJLPTの取得状況および受験予定などを尋ね

表1. JLPT取得状況と受験予定（人数）²

学期	全受講者数	JLPT取得状況			JLPT受験予定		
		N1取得済み	N2取得済み	JLPT未受験またはN3以下取得済み	N1受験予定	N2受験予定	受験予定なし
2020年度前期	2	0	1	1	2	0	0
2020年度後期	6	3	3	0	3	0	3
2021年度前期	5	1	2	2	2	1	2
2022年度前期	7	5	0	2	0	2	5
2022年度後期	7	3	3	1	3	1	3
2023年度前期	4	1	3	0	4	0	0
2023年度後期	11	2	6	3	9	0	2
2024年度前期	5	2	0	3	1	3	1
2024年度後期	10	2	3	5	9	1	0

ることによって初回時におけるレベルを把握しているが、JLPTの取得状況だけを見ても、表1に示すように、学期ごとにレベルが異なっている。また、学期によっては同じクラスにN1を既に取得している学生とこれからN2を受けたいと思っている学生が存在するなど、受講者間のレベル差も大きい。

2.2 授業目標と使用教材の選定

授業初回のアンケートで将来の目標（日本語を使って、どんなことをしたいか）を尋ねたところ、「日本で就職したい」「日本の大学院に進学したい」「日本語の先生になりたい」「翻訳家になりたい」「通訳になりたい」「日本人のように日本語を話せるようになりたい」「学部の授業がすべて理解できるようになりたい」など、毎学期、千差万別であった。そこで、「聴解演習D」における授業の目標は、受講者が置かれている状況と現在のレベルをもとに設定することにした。「聴解演習D」の受講者は、本学の大学院生や研究生、あるいは自国で日本語や日本文化を専攻する大学生であり、最も必要とされる能力は「講義、研究発表、講演、ニュース、ニュース解説などの知的談話を理解する上で必要とする聴解能力」(山本1997:92)だと考えられる。このようなことから、授業の目標は、日本語で授業を受けたり研究活動をしたりするために必要な聴解能力を高めることに設定した。

また、「聴解演習D」の受講者は今後JLPTの受験を考えている学生がほとんどで、対策授業への要望もあり、中には既にN1に合格しているが、高得点を目指して再度受験するという学生もいたことから、レベルとしてはJLPTのN1に合格することができる聴解力³を目指すことにし、その練習も少し取り入れることにした。受講者の中には、これからN2取得を目指すという学生もいたが、そのような学生からは「N1の勉強をしたとしても、N2のための勉強にもなる」という発言があったこともあり、設定レベルをN1として練習を行うことにした。

以上のことから、メインの教材としては『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ 聴解中上級』および『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ 聴解 上級』を使用することにした。この教材は「大学での勉学に必要な日本語、特に講義や口頭発表を聞くための力を養成」⁴することができ、「単に講義や発表を聞くだけではなく、概要をつかみ、話の構成を考えるために、ノートをとったり、要約を書いたりする力の養成」⁵もできるということから選定した。聴解力を伸ばすためには、言語的知識（語彙や文法項目、文章構成など）や言語外的知識（文化的背景や一般常識的な知識など）を増やすことが重要であり、この教材を利用することにより、それらの知識を獲得することも目指せると考えた。また、「聴解演習D」の受講者は「口頭表現D」も受講する傾向にあり⁶、毎年度後期の「口頭表現D」ではシャドーイングの教材⁷を用いた練習も取り入れられていることから、Dクラスの学生はこのシャドーイングの教材によって中上級レベルの対話形式の様々な談話を学ぶことができると考え、本稿の「聴解演習D」のほうでは、より長い独話形式のテキストを扱うことにした、というのも教材選定理由の1つである。

一方、JLPT N1対策の教材としては『日本語能力試験』対策 日本語総まとめN1聴解』や『日本語能力試験問題集 N1聴解スピードマスター』、『日本語能力試験 N1聴解 必修パターン』から一部抜粋して使用することにした。これらの教材を使用することによって、出題パターンを知るのはもちろん、会話に特有の音声や言語表現を学ぶこともできるため、JLPT N1対策の教材は、様々なタイプの談話を聞き取る練習にもなるだろう。

3. 授業内容

3.1 レベルチェック

先に述べたように、「聴解演習D」を受講する学生の日本語レベルは学期によって異なるため、どの学期でも、まず初回の授業でJLPTの取得状況を尋ねるとともに、JLPT N1レベルの模擬試験を実施して、現時点でのおおよその聴解力を把握した。以下の表2は、各学期の初回に実施したJLPT N1相当の模擬試験の結果を示したものである⁸。

表2. JLPT N1レベルの模擬試験の正答率(%)※

学期	2023年度前期	2023年度後期	2024年度前期	2024年度後期
正答率の分布	39.1~62.5	34.4~79.7	40.6~75.0	32.8~76.6
正答率の平均	52	58.9	59.1	57.8

注：※正答率はすべて100%換算した数字である。(以降の表の正答率も同様。)

どの学期も受講者間のレベル差が大きかったため、メイン教材とした『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ 聴解 中上級』および『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ 聴解 上級』から、学期の前半は中上級レベル、後半は上級レベルのものを扱うことにした。

3.2 授業の概要

授業のメイン教材で取り上げるトピックは、日本の文化的な知識が習得できるものを中心に選定しているが、受講者の興味・関心も参考にしているため、学期ごとに異なっている。そこで、ここでは、例として2024年度後期の授業を取り上げ、その概要を述べる。

以下の表3は2024年度後期に実施した授業内容の概要である。

表3. 2024年度後期の授業内容

回	メイン教材※	JLPT N1 対策	宿題 (要約)	ディクテーション テスト
1	学習状況等のチェック	レベルチェック テスト		
2	授業の説明 「掃除」(中上級L1)	会話表現	「掃除」	
3	「掃除」(中上級L1) FB 「体験プレゼント」(中上級L4)	即時応答	「体験プレゼント」	
4	「体験プレゼント」(中上級L4) FB 「卵かけごはん」(中上級L7)	課題理解	「卵かけごはん」	「掃除」
5	「卵かけごはん」(中上級L7) FB 「剣道」(中上級L9)	ポイント理解	「剣道」	「体験プレゼント」
6	「剣道」(中上級L9) FB 「落語」(中上級L10)	概要理解	「落語」	「卵かけごはん」

7	「落語」(中上級L10) FB 「そばをすすする音」(中上級L11)	統合理解①	「そばをすすする音」	「剣道」
8	「そばをすすする音」(中上級L11) FB 「虚偽の自白」(中上級L15)	統合理解②	「虚偽の自白」	「落語」
9	「虚偽の自白」(中上級L15) FB 「天神様」(上級L2)	まとめ	「天神様」	「そばをすすする音」
10		聴解テスト		
11	「天神様」(上級L2) FB 「丁重語」(上級L15)		「丁重語」	「虚偽の自白」
12	「丁重語」(上級L15) FB 「茶の湯」(上級L11) 前半			「天神様」
13	「茶の湯」(上級L11) 後半 聴解テスト		「茶の湯」	「丁重語」
14	語彙テスト 「茶の湯」(上級L11) FB 語彙テスト・聴解テストFB	聴解テストFB		

注：※メイン教材の「」内は各課のテーマ、()内は該当するレベルと課を表す。

3.2.1 JLPT N1 対策

JLPT N1 対策は授業前半の3分の1ほどを充て、表3に示すように、出題のパターンごとに扱い、毎回それぞれのパターンの特徴や注意すべき点などの説明とパターンに対応した形式の問題の聴解練習を行った。教材は『日本語能力試験』対策 日本語総まとめN1聴解』の「第2章 問題のパターンに慣れよう」を使用し、時間的に余裕があるときは『日本語能力試験問題集 N1 聴解スピードマスター』または『日本語能力試験 N1 聴解 必修パターン』から数問抜粋して使用した。

3.2.2 メイン教材

メイン教材とした『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ 聴解 中上級』および『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ 聴解 上級』を使用した授業のおおよその流れは以下のとおりである。

- 1) 導入：既有知識の活性化・本文の内容の予測。
- 2) 本文の音声を聞く。
- 3) 音声で提示された正誤問題を聞いて、各自解答を記入する。→全体で解答を確認する。
- 4) 内容に関する質問が書かれたプリントを見て、再度本文の音声を聞き、各自解答を記入する。→全体で質問ごとに解答を確認する。
- 5) 本文の話の構成を確認する。
- 6) 本文の要約に入れるべきポイントを確認する。
→要約は宿題とし、次回の授業時に提出する。
(以下は本文の振り返り (FB))
- 7) 前回の授業で聞いた本文の音声を、スクリプトを見ながら聞く。→語句や表現の確認。

8) 本文の内容に関連する話や内容から発展させた話をする。

授業では、まずディクテーションテストを実施する。ディクテーションテストについては、表3に示すように、本文の振り返りをした次の回に実施している。テストは本文中に使われていた語句や表現が含まれたものを短文の形式で出題し、教師が読み上げたものをテスト用紙に記入してもらう。採点したものはその次の回に返却し、フィードバックする。そして、テスト回収後に、添削した要約を返却し、特に気になった点について解説・確認をしている。

次に、JLPT N1対策の聴解練習を行い、その後、上記7)、8)のように前回の授業時に聞いた本文の振り返りを行う。本文中の語句や表現については、受講者から質問が出ることもあるが、質問が出ない場合は、こちらから問いかけて説明してもらうことにしている。何度か扱ったテーマの中には、受講者からよく質問される表現がある。例えば「落語」というテーマのときには話の中に使われている「さりげなく」という表現の意味を聞かれることが多い。このような表現の場合は、質問として出なかった場合にも確認するようにしている。また、本文の内容に関連した話や発展させた話というのは、例えば「体験プレゼント」というテーマの話聞いたときには、このようなプレゼントについてどう思うか、あなたの国ではこのようなプレゼントを贈ることがあるか、あなたが「体験プレゼント」を贈るなら、誰にどんなプレゼントを贈りたいか、などといったことについて話してもらう。

このように本文の内容に関連する話をした後には、次の本文の導入に移る。本文の聴解は上記1)～6)の流れで行った。まず、本文を聞く前作業として受講者の既有知識を活性化させ、本文の内容を予測させるために、テーマについて話したり、内容につながるような話をしたりする。例えば「卵かけごはん」というテーマでは、「卵かけごはん」を知っているか、生卵を食べたことがあるか、普段卵をどのように食べているか、などと尋ねたり、「卵かけごはん」の写真を見せたりして、話の内容を予測させる。

次に、本文の音声を2回聞かせる。音声を聞く際には、ノートにメモを取りながら聞くように指示する。ただし、細部の聞き取りは再度行うため、聞き取れない言葉があってもそれにこだわらないように、と注意を与え、ここではひとまず大意を取ることに留意させる。

本文を2回聞いた後に、内容に関する正誤問題の質問を音声で聞かせて、プリントに答えを記入させる。解答の確認は再度質問の音声を聞かせてから選んだ答えを言ってもらうことにしている。

正誤問題の解答の確認後、内容確認の問題に移る。まずプリントに書かれた質問を見てもらい、何を聞き取るべきかを把握してもらう。それから本文の音声を聞き、メモを見ながら各質問の解答を記入してもらう。たいていの場合、簡単な問いにはすぐに答えられるが、解答が少し長い文になるところでは、ところどころ聞き取れていないことがあり、文の形にして答えるのが困難なことが多い。そのため、その質問の答えに該当する部分の音声だけ再度聞かせたり、完璧ではないもののある程度聞き取れた他の学生の答えとすり合わせて解答を導き出したりする。また、学生が自分で文を再構成してまとめるのが難しい場合は、まずは本文の音声で述べられている言い回しでまとめたものを提示して、その後、短くまとめた解答を模範的に示すようにしている。

内容確認の質問の答えを確認した後は、話の構成の確認をする。このように構成を意識させることは、談話のパターンを知り、談話展開の予測能力をつけることにつながると考えられる。ま

た、このように構成を知ることが、受講者が口頭発表をする際の参考になるのではないかと思われるため、話の構成は必ず確認している。なお、話の構成を確認する際には、受講者のレベルを考慮して、ある程度出来上がったものを提示している。受講者には本文中の表現や、段落の見出しとなるような言葉をところどころ空欄にした構成表を配布し、各自でそれを完成させた後に全体で解答を確認して、改めて全体の構成を意識してもらう。

最後に、本文を要約する際にポイントとなる内容を確認し、要約を宿題で書いてくるように指示をする。宿題は次回の授業時に提出してもらい、回収した次の回に添削したものを返却し、フィードバックする。

3.3 評価方法

JLPT N1対策では、各問題パターンの練習と総復習を行った後に『日本語能力試験問題集 N1 聴解スピードマスター』の「第2回 模擬試験」を使用して、聴解テストを実施している。これは初回の授業でレベルチェックのために使用した『日本語能力試験問題集 N1 聴解スピードマスター』の「第1回 模擬試験」と同じ構成の試験問題になっているため、初回との違いを比較できると考えたからである⁹。

メイン教材の聴解テストは、『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ 聴解 上級』の教師用資料として配布されているテストのうちの1つを使用している。授業で使用した音声をテストにすることも検討したが、一度聞いた音声で、しかも、スクリプトも目にしているものをテストとして使用すると、聴解能力というより、記憶力が試されるのではないかと思われたので、テストにはテスト用の音声を採用することにした。テストには授業時の練習と同様に、○×で答える正誤問題と、記述で答える内容確認問題を出題している。ただし、記述問題は文章の記述力ができるだけ影響しないように、空欄補充の形式で行うことにした。

メイン教材については、上述の音声を用いたテストの他に、ディクテーションテストと語彙テストも実施している。ディクテーションテストについては、先述のとおり、既習の課ごとに実施しているが、語彙テストについては、これまでに聞いたすべての本文の中の語彙から出題している。語彙テストを毎回行うことも検討したが、ディクテーションを行うことを優先させたため、語彙については学期末にまとめて行うことにした。

以上のJLPT N1レベルの聴解テスト、メイン教材の聴解テスト、ディクテーションテスト、語彙テストの他に、宿題として課した要約、平常点（授業参加度等）も評価の対象としている。

4. 授業の実践結果

4.1 JLPT N1 対策

以下の表4は、授業でJLPT N1対策の練習をした後に実施した聴解テストの結果を示したものである。結果を比較するために、表2で提示した模擬試験の結果の数値も再掲する。

JLPT N1対策の練習を一通り終えた時点で実施した聴解テストの結果は、いずれの学期も授業初回時に実施した模擬試験の結果に比べて正答率が高くなっていった。個々の受講者の結果を見ても、全員の正答率がアップしていた。受講者の聴解力には依然として差があるものの、その差が初回時よりは縮まった学期もあった。もちろん、この結果だけで聴解力がついたとは断言でき

表4. JLPT N1 レベルの聴解テストの正答率 (%)

学期	2023年度前期	2023年度後期	2024年度前期	2024年度後期
正答率の分布 (初回時)	39.1~62.5	34.4~79.7	40.6~75.0	32.8~76.6
正答率の平均 (初回時)	52.0	58.9	59.1	57.8
正答率の分布 (練習後)	64.1~75.0	51.6~90.6	57.8~86.2	68.8~78.1
正答率の平均 (練習後)	68.8	75.3	69.1	71.1

ないが、聴解力を測る1つの指標とはなるだろう。授業にJLPT対策を取り入れることの是非については様々な見解があると思われるが、少なくとも「聴解演習D」の受講者には有意義であったようで、授業後に実施したアンケートでも「JLPT対策の練習はあったほうがいいのか」という質問に対して、ほとんどの受講生が「(JLPT対策の練習は) あったほうが良いと思う」と答えていた。中には「あったほうが良いと思う。それも勉強の役に立っているから」といったコメントも見られ、JLPT N1対策の中で様々なタイプの談話を聞いて練習することは、総合的な聴解力を伸ばすことにも有益であったのかもしれない。

4.2 メイン教材

まず、メイン教材関連のテストの結果を以下の表5に示す¹⁰。それぞれの項目で上段は分布、下段は平均値を表している。なお、正答率はすべて100%換算した数値である。

表5. メイン教材関連のテストの正答率 (%)

学期	2023年度前期	2023年度後期	2024年度前期	2024年度後期
ディクテーションテスト	28.0~94.0	73.3~94.3	45.6~86.7	80.0~95.6
平均	65.5	82.9	70.6	88.7
語彙テスト	10~65	25~100	30~65	60~100
平均	35	63.2	49	82.1
聴解テスト (正誤問題)	50.0~75.0	75.0~100	62.5~100	50~100
平均	59.4	92.1	77.5	81.3
聴解テスト (記述問題)	27.3~65.9	54.6~93.2	36.4~72.7	70.5~90.9
平均	48.3	71.7	56.4	81.4

どのテストも学期によって平均値も分布する範囲も異なっているが、平均値を見ると、ディクテーションテストの正答率が高いほど語彙テストの正答率と聴解テストの正答率が高くなっていることがわかる。ディクテーションテストで高得点を取る学生はその前の回で学習した語句や表現をしっかりと覚えてきており、聞いた音を正しく表記することができていた。一方、ディクテー

ションテストで点を落としている学生は復習不足からか、聞いた音声を正しく表記することができておらず、また、文脈から正しい言葉を推測することもできていなかった。したがって、語彙テストや記述問題の結果にはディクテーションテストへの取り組み方が反映されているのではないかと推察される。しかしその一方で、聴解テストの正誤問題については、2023年度後期や2024年度前期に、ディクテーションテストや語彙テスト、記述問題ではそれほど点数が取れなかった学生が、聴解テストの正誤問題で高い正答率を示したということがあった。そのため、これらの学期では表5に示すように、聴解テストの正誤問題の正答率が記述問題や語彙テストの正答率よりも高くなっている。正誤問題の正答率が高いということは、話の大意を取ることができるようになったという点で一定の聴解力がついたのだと思われるが、これらの受講者が今後も日本語を使用する環境に置かれるのであれば、聞いた話の内容についてメモを取ったり、内容を第三者に正しく伝えたりする場面では正しい表記ができるということも必要だと思われるため、まずは既習語彙が正しく表記できるように、習った語句や表現の復習を促していきたい。このような復習の積み重ねが語彙を増やすことにもつながっていき、さらに聴解力を伸ばしていけるのではないだろうか。

5. 今後の課題

前節で述べたように、依然として受講者間の差が見られるものの、全体としては個々の聴解力を伸ばすことができたように思われる。しかし、改善すべき課題は未だ多く残されている。以下では今後検討すべき主な課題について述べ、ひとまずのまとめをしたい。

5.1 時間配分

まずは、時間配分の問題である。授業にJLPT対策を入れることにしたため、メイン教材に使用できる時間はおよそ3分の2ほどになった。その中で1つのテーマを終わらせるためには効率よく授業を進めなければならない。特にメイン教材の上級の本文は長いものが多く、1つのテーマで1コマ(90分)かかってしまうものや、内容によってはそれ以上かかってしまうものもある。2023年度やそれ以前の授業では予定通り進まず、途中でスケジュールの変更を余儀なくされたことがあったため、2024年度前期からはJLPT対策を一通り終えてから、上級の長い本文のものを扱うことにした。そして、例えば「茶の湯」の本文のように、本文中の語彙に難しいものが多く、内容も歴史的な背景の説明等受講者にとって馴染みのないものである場合には、1コマを使っても終わらなかったことがあったため、2024年度前期からは前半と後半に分けて扱うことにした。このように上級のほうを扱う場合には時間がかかることもあるため、授業計画の段階で、できるだけ進度を予測して準備をする必要があり、各テーマをどのように配分して、どのように進めていくか、再度考えなければならない。また、個々の活動を行う際には時間を意識した臨機応変な対応が求められる。例えば、メイン教材を扱った授業では、テーマに関する話し合いを、聞く前と聞いた後で取り入れているが、この話し合いで受講者の国籍が多様であった際に、各国の状況について話してもらっただけで想定外の時間を要してしまったというようなことがあった。このような場合は例えば話す内容を予め宿題で書いてきてもらうなどといった工夫をして、時間を意識した活動をする必要がある。

5.2 聞き取り方の指導

授業中の様子を見てみると、どの学期も本文を聞く際に、しっかりメモを取っている学生とそうではない学生がおり、正誤問題については、メモの有無が正答率にそれほど影響していないように思われたが、記述問題については、やはりメモを細かく取っていた学生のほうが答えられることが多かったという印象である。しかしその一方で、日本語能力の高い受講者の中には、メモをそれほど残していなくても内容に関する質問には自分の言葉で答えられるという学生もごくわずかながら存在した。このような学生は、本文で用いられていた未習語彙については再生できないこともあったが、内容を理解できていて自分の言葉で説明できるという点では優れた聴解力を身につけていると考えられる。したがって、細かくメモを取ることは有効だとも限らず、内容を理解するために聞くということに注目した聞き方を指導していかなければならない。その指導方法については今後検討していきたい。

5.3 解答の確認方法

記述問題の解答の確認は、これまではまず各々に取ったメモをもとに解答を記述してもらい、その後、指名して答えを言うてもらうという方法で進めていた。その際、指名した学生が答えられない場合には、聞き取れた語句だけでも挙げてもらい、それ以外に聞き取れていたことがある他の学生に発言を促し、解答を補完してもらっていた。そして、全員が聞き取れていなかった場合には、その解答に該当する部分だけをもう一度聞いてもらい、解答を確認したが、それでも未習語彙が複数含まれていて、内容的にも難しいという場合には教師のほうから解答を示していた。しかし、この確認方法では、教師の発話が多くなる傾向にあるため、一方的で単調な授業になりがちである。学生のモチベーションを上げ、自律的な学習を促すためにも、今後は確認方法を改善し、ピア活動などを取り入れることも検討してみたい。

5.4 宿題の内容

「聴解演習D」では、これまでは本文の要約を書いてくることを宿題として課してきた。しかし、要約を書くという作業は学生にとって負担の重い作業であり、その必要性を感じない受講者がいる可能性もある。要約を書く際には、話の内容はもちろん、そこで使われていた語彙や表現も想起するとともに、話の全体構造も意識するということが考えられるため、要約を書くことは知識獲得の補強となるのではないかと考えて、要約を宿題としたのだが、その必要性については今一度考えてみる必要がある。数年前の受講者と2024年度の受講者の中に、最初の宿題提出時に、要約ではなくて話の内容についての意見または感想のような文章を書いてきた学生が数名いた。その当時は要約を課題としていたため、それらの学生には要約に書くべき内容について説明し、要約を書いてくるように指示をしたが、改めて考えてみると、内容についての意見または感想を書いてもらうということも、内容の理解を確認するための1つの方法として有効かもしれない。このような宿題の出し方についても今後検討していきたい。

6. おわりに

本稿では、岐阜大学日本語・日本文化教育センターにおいて2023年度前期から2024年度後期ま

での計4学期に実施した「聴解演習D」の授業内容やその実践結果について報告するとともに、今後に向けての課題について述べてきた。「聴解演習D」の授業ではアカデミックな聴解力をつけるために、独話型の長いテキストをメイン教材として聴解練習を行ってきた。また、JLPT対策も取り入れて、N1レベルの聴解力をつける練習も行った。JLPT対策では一定の効果が見られたが、メイン教材を使った授業のほうは多くの課題が残されている。「聴解演習D」の受講者のほとんどが、将来的には日本語母語話者と同等レベルの日本語力をつけたいと思っていることから、その最終目標に少しでも近づけるように、今後も中上級レベルの学習者への効果的な指導方法について考え、授業を改善していきたい。

注

- 1 各コースの詳細については、本紀要年報編「1. 日本語研修コース」を参照のこと。
- 2 参考までに2020年度後期から2022年度後期までの状況も提示した。なお、2021年度後期は「聴解演習D」を担当していなかったため、表に含まれていない。
- 3 国際交流基金（2012）によるJLPT N1レベルの「聞く」ことの認定の目安は次のとおりである。「幅広い場面において自然なスピードの、まとまりのある会話やニュース、講義を聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係や内容の論理構成などを詳細に理解したり、要旨を把握したりすることができる。」
- 4 東京外国語大学留学生日本語教育センター（2014：3）および東京外国語大学留学生日本語教育センター（2015：3）。
- 5 東京外国語大学留学生日本語教育センター（2014：3）および東京外国語大学留学生日本語教育センター（2015：3）。
- 6 岐阜大学日本語・日本文化教育センターの「一般コース」の学生は自身の必要性や時間割の都合などから受講する授業を選択できることになっている。ただし、日研究生は該当レベルのすべての科目を受講しなければならないことになっている。クラスの他の授業科目については本紀要年報編「1. 日本語研修コース」の「一般Dクラス」の項目を参照のこと。
- 7 齊藤仁志・深澤道子・掃部知子・酒井理恵子・中村雅子（2022）。
- 8 模擬試験には『日本語能力試験問題集 N1聴解スピードマスター』の「第1回 模擬試験」を使用した。
- 9 なお、この教材『日本語能力試験問題集 N1聴解スピードマスター』をテストとして使用したのは2023年度前期から2024年度後期の間である。それ以前はオンラインで受講する学生もいたため、実施方法などの困難さから『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN1聴解』の「まとめ問題」や「総まとめ問題」を用いていた。
- 10 メイン教材の聴解テストは2020年度後期から使用しているが、ディクテーションテストは2022年度後期から、語彙テストは2023年度前期から取り入れたため、ここではすべてのデータが揃っている2023年度前期から2024年度後期までのものを提示する。

参考文献

- 大森雅美（2013）『日本語教師の7つ道具シリーズ6 聴解授業の作り方編』アルク
 国際交流基金（2008）『国際交流基金日本語教授法シリーズ 第5巻「聞くことを教える」』ひつ

じ書房

国際交流基金（2012）「N1～N5：認定の目安」日本語能力試験

<https://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html>

齊藤仁志・深澤道子・掃部知子・酒井理恵子・中村雅子（2022）『新・シャドーイング 日本語を話そう！ 中～上級編 英語・中国語・韓国語訳版』くろしお出版

日本語教育学会編（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店

山本富美子（1997）「第Ⅰ部第3章 聴解指導の視点と技法」藤原雅憲・靱山洋介編著『上級日本語教育の方法』凡人社

使用教材

氏原庸子・岡本牧子（2015）『日本語能力試験 N1 聴解 必修パターン』Jリサーチ出版

佐々木仁子・松本紀子（2011）『「日本語能力試験」対策 日本語総まとめN1 聴解』アスク出版

東京外国語大学留学生日本語教育センター（2014）『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ 聴解 中上級』スリーエーネットワーク

東京外国語大学留学生日本語教育センター（2015）『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ 聴解 上級』スリーエーネットワーク

藤田朋世・青木幸子・塩川絵里子・水野沙江香・渡部真由美（2011）『日本語能力試験問題集 N1 聴解スピードマスター』Jリサーチ出版